

平成 29 年度 B 問題に挑戦

中学校

国 語

富山県教育委員会

次の【物語「トロッコ」の一部】を主人公「良平」の心情の変化に着目して読み、【物語に関する資料】を参考にし、あとの問いに答えなさい。

【物語「トロッコ」の一部】

「ここまでのあらずじ」 吉浜よしはまに住んでいる八歳の良平りょうへいは、二月の初旬に、二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子とも、村外れに置いてあるトロッコに乗り、背の高い土工にどなられて逃げ出した。それきり、良平は工事場のトロッコを見ても、二度と乗ってみようと思ったことはない。

そのち十日余りたつてから、良平はまたたった一人、昼過ぎの工場にたたずみながら、トロッコの来るのを眺ながめていた。すると土を積んだトロッコの他に、枕木まくらぎを積んだトロッコが一両、これは本線になるはずの、太い線路を登ってきた。このトロッコを押しているのは、二人とも若い男だった。良平は彼らを見たときから、なんだか親しみやすいような気がした。「この人たちならば叱しかられない。」——彼はそう思いながら、トロッコのそばへ駆けていった。

「おじさん。押してやろうか？」

その中の一人、——しまのシャツを着ている男は、うつむきにトロッコを押したまま、思ったとおり快い返事をした。

「おお、押してくよう。」

良平は二人の間に入ると、力いっぱい押し始めた。

「わ、れはなかなか力があるな。」

他の一人、——耳みみに巻きたばこを挟んだ男も、こう良平を褒ほめてくれた。

そのうちに線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくともいい。」——良平は今にも言われるかと内心気がかりでならなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、黙々もくもくと車を押し続けていた。良平はどうとうこらえきれずに、おずおずこんなことを尋ねてみた。

「いつまでも押していい？」

「いいとも。」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ。」と思った。

五、六町余り注押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。そこには両側のみかん畑に、黄色い実が幾つも日を受けている。「登り道のほうがいい、いつまでも押させてくれるから。」——良平はそんなことを考えながら、全身でトロッコを押すようにした。

みかん畑の間を登りつめると、急に線路は下りになった。しまのシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ。」と言った。良平はすぐに飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、みかん畑の匂においをおりながら、ひた滑りに線路を走りだした。「押すよりも乗るほうがずっといい。」——良平



工事用のトロッコ

は羽織に風をはらませながら、あたりまえのことを考えた。「行きに押すところが多ければ、帰りにまた乗るところが多い。」——そうも考えたりした。竹やぶのある所へ来ると、トロッコは静かに走るのをやめた。三人はまた前のように、重いトロッコを押し始めた。竹やぶはいつか雑木林になった。つま先がりのところどころには、赤さびの線路も見えないほど、落ち葉のたまっている場所もあった。その道をやつと登りきったら、今度は高い崖の向こうに、広々と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、あまり遠く来すぎたことが、急にはつきりと感じられた。

三人はまたトロッコへ乗った。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走っていった。しかし良平はさっきのように、おもしろい気持ちにはなれなかった。「もう帰ってくればいい。」——彼はそうも念じてみた。が、行く所まで行き着かなければ、トロッコも彼らも帰れないことは、もちろん彼にもわかりきっていた。

その次に車の止まったのは、切り崩した山を背負っている、わら屋根の茶店の前だった。二人の土工はその店へ入ると、乳飲み子をおぶったかみさんを相手に、悠々と茶などを飲み始めた。良平は一人いらいらしながら、トロッコの周りを回ってみた。トロッコには頑丈な車台の板に、跳ね返った泥が乾いていた。

しばらくのち茶店を出てきしなに、巻きたばこを耳に挟んだ男は、(そのときはもう挟んでいなかったが)トロッコのそばにいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「ありがとう。」と言った。が、すぐに冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂い(にお)がしみついていていた。

三人はトロッコを押しながら緩い傾斜を登っていった。良平は車に手を掛けていても、心は他のことを考えていた。

その坂を向うへ下りきると、また同じような茶店があつた。土工たちがその中へ入つたあと、良平はトロッコに腰を掛けながら、帰ることばかり気にしていた。茶店の前には花の咲いた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる。」——彼はそう考えると、ぼんやり腰掛けてもいられなかった。トロッコの車輪を蹴ってみたり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押してみたり、——そんなことに気持ち紛らせていた。

ところが土工たちは出てくると、車の上の枕木(まく)に手を掛けながら、むぞうさに彼にこう言った。

「われはもう帰んな。俺たちは今日は向こう泊まりだから。」

「あんまり帰りが遅くなると、われのうちでも心配するぞら。」

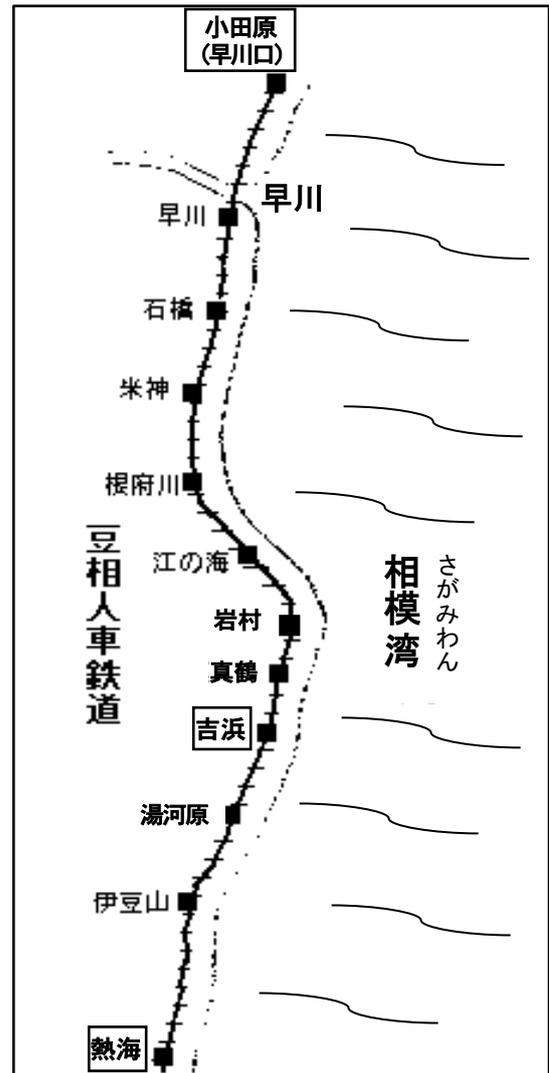
良平は一瞬間(いつしゆんかん)あつけにとられた。もうかれこれ暗くなること、去年の暮れ母と岩村(いわむら)まで来たが、今日の道はその三、四倍あること、それを今からたつた一人、歩いて帰らなければならないこと、——そういうことが一時(いちじ)にわかつたのである。良平はほとんど泣きそうになった。が、泣いてもしかたがないと思つた。泣いている場合ではないとも思つた。彼は若い二人の土工に、取つてつけたようなおじぎをすると、どンドン線路づたいに走りだした。

(注1) 町＝長さの単位。一町は約一〇九メートル。

(芥川龍之介「あくたがわりゆうのすけ」「トロッコ」による。)

【物語に関する資料】

【資料】 物語「トロッコ」の舞台である  
「ずそうじんしゃてつどう豆相人車鉄道」の路線図



一 次のAからEまでの言葉を使って、【物語「トロッコ」の一部】の展開に沿って良平の気持ちの変化を表すとすると、どのようになりますか。A、B、C、Dを適切に並べ替えて、解答欄の五つの空欄に、Eにつながるようになして書きなさい。ただし、Aは二回使うこととします。

- A 不安感
- B 満足感
- C 焦燥感
- D 期待感
- E 悲壮感そう

二 【物語に関する資料】を参考にすると、二人の土工と良平は、吉浜にある村外れの工事場から、小田原方向と熱海方向のどちらに向かって進んでいったと考えられますか。あなたの考えとその理由を、次の条件1と条件2にしたがって書きなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件1 小田原方向と熱海方向のどちらに進んでいったのかを明確にして書くこと。

条件2 条件1のように考えた根拠を【物語の一部】の中から一か所引用した上で、理由を説明すること。

なお、引用した部分は、「」を付けて示すこと。